「あまみエフエム　ディ！ウェイヴ」放送原稿〈７月１３日（金）放送分〉

テーマ「奄美歳時記」

　あまみエフエム　ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。県立奄美図書館です。今週のこの時間は，今年度第４回目の，シリーズ「奄美歳時記」をお送りします。

「燃える太陽。真っ白な砂。エメラルドグリーンの海。サンゴ礁の海は美しい。
　ひとたび水の中に潜れば，はっと息をのむ光景が広がる。サンゴの林の間に群れているコバルトブルーやライトブルーのスズメダイたち。黄色と黒の縞のスーツを着込んだツノダシ。緑のブダイ。魚たちはみな，派手な衣裳を身にまとって泳いでいる。シライトイソギンチャクはたくさんの白い糸のような触手をゆらめかし，その中にメタリックオレンジのクマノミがゆったりと浮いている。
　水はあくまでも透明。海底の真っ白な砂の上には，真っ黒なナマコが点々としており，岩の間からは，シャコガイが青く輝く外套膜の裾をきらめかせる。ハマサンゴの巨大な塊の上には，色とりどりのパラソルの花が咲ききそっている。これはイバラカンザシゴカイの鰓だ。じつに美しい。この目にも鮮やかな光景は，生涯忘れられないものとして脳裏に焼き付くにちがいない。一生に一度は，いい音楽に心をうばわれ，また名画に感動しなければいけないように，サンゴ礁の海に一度は潜ってみなければ，その人の一生は，その分だけ貧しくなると私は思っている。」
　これは，本川達雄さんの著書「サンゴとサンゴ礁のはなし」の冒頭部分です。

　奄美大島に夏がやってきました。「燃える太陽，真っ白な砂，エメラルドグリーンの海」という本川さんの言葉のように，奄美大島全体が輝いています。また，１か月程前の新聞では，「命の輝きゆ～らゆら」，「豪雨のちサンゴ産卵」という見出しで，「サンゴの産卵」についての記事が掲載されました。

　奄美大島周辺のサンゴは，１９９８年の地球温暖化による白化現象，２０００年から７年程続いたオニヒトデの大量発生，２０１０年の奄美豪雨災害でダメージを受けましたが，徐々に回復してきているようです。サンゴの産卵を撮影した興克樹さんは，「１割くらいは死んでいたが，これだけ多く産んでいる姿にたくましさを感じた」と新聞記事の中で述べています。

　サンゴはイソギンチャクと同じ刺胞動物の仲間で，３㎜程度のイソギンチャク型のポリプが骨格の表面の管の中に潜み，夜になると触手を広げてプランクトンを待ち構え，そのプランクトンを食べて生きています。

　そして，サンゴは，精子で卵を受精させる有性生殖と，雄・雌に関係なくポリプの分裂や発芽などで増える無性生殖で個体を増やします。多くのサンゴは雌雄同体とされ，一

つの体の中に雄と雌の機能を持っていますが，自分の卵と精子を受精させることはできません。「サンゴの産卵」とは，数個の卵と無数の精子を作って，直径約１㎜ほどの丸い形に固めたカプセルを海中に放出することです。やがて，それは海面に達し，はじけ，波によって拡散し，他の卵や精子と出会い受精するのです。

中村庸夫（つねお）さんの著書「サンゴ礁と海の生き物たち　地球環境を守るサンゴ礁」では，サンゴの産卵について，次のように説明されています。
「卵の成熟には水温が関係するとされ，成熟した卵の産卵日は月齢周期が関係し，多くのサンゴは種類毎（ごと）に満月か，その前後数日以内に一斉に産卵します。さらに産卵時間は，種類毎に日没からの時間に同調させているのです。
サンゴは海中から月の満ち欠けをきちんと知り，さらに，日没からの時間も計り，同じ種類のサンゴは同じ日の，ほぼ同じ時間帯に一斉に卵や精子を放出するのです。ひょっとするとサンゴは特殊な化学物質などをお互いに出し合図して産卵する日や時間を決めているのかもしれません。」

サンゴ礁をつくる石サンゴの先祖は，今から約４億６千万年も前の，古生代のオルドビス紀とよばれる時代に生まれました。そして，約２億１千万年前の三畳紀（さんじょうき）の時代になって，今のサンゴの仲間があらわれます。その後の恐竜が栄えたジュラ紀という時代には，最もサンゴの数や種類が増えています。

それほど古い時代から生きるサンゴが，様々な環境の変化の中で，環境に応じた進化をとげながら，生き続けています。そして，子孫を残すために，種類毎に日にちや時間を調整して行う産卵は神秘的な現象であるといえます。さらに，サンゴ礁では，サンゴとその中に共生する藻類（そうるい）が光合成で作り出す栄養分や酸素によって豊かな海となり，多様な生物が生きることができます。奄美大島の美しい海は，サンゴ礁がつくりだしているといってもよいのではないでしょうか。

本川達雄さんは，著書「サンゴとサンゴ礁のはなし」の最後で，「南の時間はゆったりと流れる。（中略）車もコンピュータも携帯電話も，すべて時間を早めるものと言えるだろう。そうして，これらをつくるのにも使うのにも，莫大なエネルギーがいる。もっと時間をゆっくりにすればエネルギー消費量が減り，地球温暖化も止められる。非人間的な時間からも解放される。本当は，少々不便で時間がかかった方が，人間らしい時間で生きていけ，幸せへの道ではないだろうか。」と述べています。

奄美大島の白い砂，コバルトブルーの海，そこに住む様々な生き物たちをいつまでも残すために，自分にできることを，今一度考えてみてはどうでしょうか。

以上，鹿児島県立奄美図書館でした。